



当日の会場の様子。語り部の君川さんから与えられたテーマに参加者の皆さんは子どもの頃の思い出などを語ってくれました。

みなと 今・むかし新聞

第2号

平成17年 1月

発行 港区立生涯学習センター

生涯学習センターの事業

山形の民話「語り部」の話を聞く

に参加しました。

一〇月一三日に「山形の民話、『語り部』の話を聞く」という講座(きょうざ)が港区立生涯学習センターで行われ、二十名程の「語り」に関心のある参加者が集まりました。

講師(きょうし)の君川(きみかわ)さんは、山形県の生まれで、十五年程前から子どもの頃から聞いて育った山形の民話や世界の民話、そして子どもの頃の自分の経験などを「語り部」として語り伝える活動(かつ)をしています。今回は、子どもの頃に民話を聞かせてくれた君川さんのおじいさんのエピソードなど

を交えて九十分もの間じっくりと「語り」を聞かせてもらうことができました。山形の君川さんが育った地域は、とてもお酒好きな人が多いこと、お酒にまつわるお話もいくつか語ってもらいました。酒好きでなければならぬお酒好きだったと、柿のしほみを取るためにお酒につける作業の際に、おじいさんがまず自分で飲んでからはじめるので、なかなかつけ終わらなかったお話など君川さん自身も子どもの頃を振り返っているような様子で話してもらいました。また、山形の自然のなかで語り継(ついで)がれてきたお話し、自然の生き物が登場する民話も多くありました。山形では秋にほおずきが赤くなるそうですが、それはお日様が寒くなってきたほおずきのなかに泊めてもらったから、というお話や、「雪迎(ゆきむかえ)」と言って冬のはじまりにクモが糸を伸ばして風に乘(の)って行く様子をクモの子の物語にしたお話など、登場する生き物への愛着(あいせき)が感じられる民話の数々を披露(ひょうじ)していただきました。

参加者にも昔の思い出を振り返ってもらおう時間が用意されました。与えられたテーマは「風」。参加者のなかからは、日比谷公園でお父さんと一緒に飛行機をつくって飛ばした思い出や(七十代男性)、戦争中の空襲(くわくしゅう)があった日に燃えている町の方角からとても熱い風が吹いてきて髪の毛が燃えそうになって妹の頭に濡れたタオルをかぶせて必死に耐えた話(六十代女性)、空襲の火災の際に神谷町の谷になったところにあった家が、熱で起きた竜巻(たつまき)で風向きが変わったおかげで燃え残った話(七十代男性)など、いろいろなことが思い出されたようです。君川さんは、こうしたふと思いついたことから話をふくらませていくことで、自分が語る話をつくっていくことができる、と話してくれました。

一枚の写真から

神明(しん)様のお祭り



九月十一日から十日間の神明神社のだらだら祭りは、子ども達にとっても、町会の人たちも、町をあげての大行事でした。昭和一四、五年頃の様子を話してみます。

神明神社の氏子(うぢこ)は、とても広い地域でした。新橋五・六丁目・田村町六丁目(桜川小学校の付近)浜松町一帯、(神明小学校の学区)片門前町・中門前町(神明神社の周辺)土手跡町(芝園橋、将げん橋の周辺)、金杉・浜町(竹芝小学校周辺)、芝・新堀町(芝小学校の付近)等まだあったかもしれませんが、私は浜松町にも、田村町にも住んでいません。

神明様には、なつかしい思い出があります。祭りの日には、学校も早く帰してくれました。祭りが近づく各家にちようちゃんが配られてきたように思います。母は夜おそくまで祭りの浴衣を弟や働いている人の分まで縫(ぬい)ってくれていた姿が目につかびます。町会ごとに浴衣(ゆい)が決められていたのでしょうか。

みき所といって、町会ごとに、神輿(みこ)や山車(やまぐるま)を飾り、祭の係の人々が待機(まち)する場所が作られています。酒やお供え物がいっぱい飾られて、高い所は、寄付してくれた人の名や品物名を書いた半紙が次々とはられました。

祭りばやしの太鼓(たいこ)を叩いている人や、鐘(かね)など鳴らす人などいて、入れ替わり男の人たちがつめていました。十日間全部ではなかったと思いますが、十四日から一七日頃までは、神輿や山車が一日のうち何回か、町の中や隣りの町会までと大移動をし、大きな人の輪がねり歩きました。「水まいておくれ」とかいいう声にあわせて水を撒かれたり、ひと休みするところには、飲み物や菓子(かし)などが用意され、それを楽しみに歩いたものでした。神明神社には、夜店の店開きのための屋台(やたい)が準備されます。九月十一日頃から神社の境内や参道に所せましとばかり、びっしり店構えが出来上がっていきます。十四日頃からは昼から夜まで賑(にぎ)やかに人の波です。神明の名物、根生姜(ねしょう)を売る店が特に多く、たくさんの方が手にぶらさげて歩くのを見ました。

だらだら祭りの一番の呼びものは、神輿の大行列でした。大門(赤門のある)の大通りに、車を止めて、氏子の各町会の出しものである大中小と様々の神輿が勢揃(せいぞろ)いします。



「だらだら祭り」の様子、写真は戦後に盛んになった女神輿の様子。(昭和30年頃)

港区立港郷土資料館所蔵

先頭は神明神社の神主さん関係の人、町会の役員、とび職の人々が、それぞれ、すてきな伴天(はてん)を着て歩いていくために、神明の花柳界(かりぎやう)の芸者(げいしや)さん達が揃いの手子舞(てこまい)の姿で参加しているのも、際立って印象に強いものでした。神社までの大行列を父に連れられて見物にいったことは数回であったのよ

うで、毎年ではなかったように思います。戦後もこの行事は行われたように思いますが、神社も建て替えられ、境内や周囲の環境も変化したので、往年のような姿は昔がたりとなったように思います。

当時旧制中学生の弟達は、小学校時代の同級生と一団となって大きく重い神輿かつぎに祭りの間中せいをし出していました。浜松町の町会からかつぎ手が欲しいという、加勢に行って夕方暗くなるまで、大騒ぎでかつぎまわっていました。また、夜は、盆(ひら)おどりです。揃(そろ)いの浴衣(ゆかり)(男の子)で町会の広い道路をくぎって、太鼓や拡声器を使って音楽を流していました。太鼓(たいこ)を叩いたり走りまわったり、友達同士、力をあわせて楽しんでいました。男の人の姿が目につきました。母や近所の女の人は本当に子どもの世話や、御もてなしに総動員でしたように記憶しています。

※「生姜市」風邪(ふうじゃ)退散(たいさん)の生姜

古くは「生姜市」といわれ、祭りの間、境内(けいん)や神社周辺で盛(も)んに生姜が売られていた。鎮座(ちんざ)當時はまわりが生姜畑であったところから、神前に供せられ、参拝者にも売られました。現在は生姜糖(しょうじょうどう)として売られ、風邪を引かないと云う。この生姜市は、広重(ひろしげ)の錦絵(きんえ)にも描(えが)かれています。(出典(しゅてん) 神明神社のパンフレット)

千木宮(ちぎのみや)の思い出

「衣服を増やす『千木宮』」

名の由来は、藤づるで編んだ器に餅を盛った餅器(もちき)を略して千器と呼んだとか、千木(千木(せんぎ) 神殿など屋根の両端に交差した長い二本の木)の用材で作ったからとか諸説あります。

神明様のだらだら祭りの際に、女の子はタンスのなかに入れておく着物が増えると言って買ってもらったものです。その由来は千木が千着に通じるというものらしいです。祭礼では、千木宮に季節の果物を盛って、神前にお供えします。

昔頂いた千木宮のお蔭(かげ)で、私のタンスには、懐(なつか)しい着物が袖(そで)をとおしてくれるのを待っています。

(中嶋房子 六十八歳)

あの日のわたし

戦時中の結婚式

昭和十九年三月、主人二十八歳、私二十歳で芝の神明様(芝大神宮)で本物のしょう・しちりきで結婚式をあげました。

戦争中で着物は白ちりめんの元禄袖(げんろくそで)、白の丸帯(まるおび)、自分の毛で高島田(たかしま)を式の前から結(ゆ)いました。式の後には、家の二階、十畳(じゅうじょう)、八畳の部屋でお客様をお呼びしました。



結婚式当日の写真。松本トミ子氏提供。

物資が少ない折、岩手の方の東京見物のお宿をするので、お餅(もち)を持参してもらい、引出物(ひきだすもの)にしました。当日は芝浦の待合(まち)にとまり、次の日、もんぺを持って伊東(いとう)、二日目修善寺(しゆぜんじ)と旅行しました。主人は三度目の招集(しょうしゅう)で鹿児島(かごしま)へ行き、二十年十月に帰宅しました。一五年前に亡くなりましたが、四男二女、孫(まご)十六人、ひ孫二人と大家族に囲まれています。当時を思い出すとやはりドキドキします。

(松本トミ子 八十一歳 芝浦在住)

生活の道具七りん

宝暦(たからごき)年間(十八世紀半頃)の寺子屋のお手本帖(てほんてい)には「七輪」が登場していて、もうその頃には普及(ふく)していたことがわかります。煮(に)炊(く)きの道具として、小型で持ち運びが可能(可能)という便利さに加えて、構造(こうぞう)もよく工夫(くふう)され(空気の通りをよくするため、穴のあいた仕切りを置き、さらに下部に風口を設けて火力を調節する。)火おこしも簡単(かんたん)、素早く火をつけることができるのです。関西地方では、すぐに怒る短気(たんき)な人を「癪(さか)癪(さか)」と呼ぶのですが、それに引掛けて、カンペキ、(が訛(まじ)って)カンテキ、というユーモラスな別名も生まれました。さらに燃料代(木炭)が安上がりで「シチリン」という語呂(ごりよ)合わせで「七厘」のニックネームもできたということです。熱効率(ねつこうりつ)がよく燃費が少なくて済むこの道具にふさわしい呼び方だと思えます。

私が子どもの頃は家の勝手口から出たところに七輪を置いてよく魚を焼いたもので、秋刀魚(さかな)などが盛大に煙を上げて焼きあがる様子を思いだしただけでも生睡(せいすい)が出てきます。

社会の目覚(めざま)しい変化の中で最近はお番(おばん)が少なくなっているようですが、長い年月私たち庶民(しよびん)の間で重宝(じゆうぼう)されてきた便利な道具のこと、まだまだ役目を終えることはないと思います。

(武 恒雄 七十歳 台場在住)



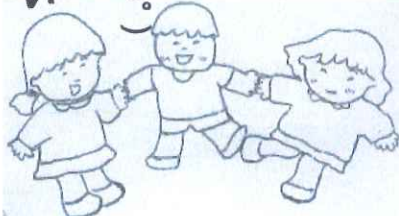
七りん



七りんの断面図

なつかしの歌

花いちもんめ
ふるさとをのめて 花いちもんめ
ふるさとをのめて 花いちもんめ
勝(かち)つてうれしい 花いちもんめ
負(まけ)けてくやしい 花いちもんめ
あの子がほしい
あの子じゃわかん
この子がほしい
この子じゃわかん
そうだしましよう
(輪(わ)になって相談する。)
きーまた
あけみちゃんがほしい
(じゃんけんぽん)
勝(かち)つてうれしい花いちもんめ
負(まけ)けてくやしい花いちもんめ



私が小学校入学前だった昭和十七、八年頃の新橋は露地(ろで)に入ると、五、六人の子どもたちがいつも遊んでおりました。友達と一緒によくこの歌を歌って遊んだものです。(昭和二十年にもなると空襲(くうしゅう)が激(げき)しくなると、このような遊びもできなくなりました。)夕方になると「人(ひと)さらい」が来るから、と用心(用心)しさよならをしたあの日の夕日を眺(なが)めるように思い出されます。(中嶋房子 六十八歳 当時新橋在住)

編集後記

生涯学習センターで実施している語り部学習会の参加者の方々の手記の新聞はつづられました。この新聞の記事は港区の地域の人や子どもたちにも地域の昔(むかし)のこと、おじいさん、おばあさんがどんな生活をしてきたのかを知ってもらいたい、という気持ちから書かれています。本で読んだ遠い昔の出来事(出来事)だと思われがちな歴史が、今、港区にいた人たちが実際に味わってきたことだということが伝えられたいと思います。毎月第二・第四水曜日に開かれる学習会にも、お気軽にご参加ください。お待ちしております。

学校の総合学習の授業や、地域のイベントにもお役に立ちたいと思います。ご連絡ください。

問合せは3431・1606 生涯学習センターまで
発行 港区立生涯学習センター

平成一七年一月一日